

五雲会

平成三十年九月十五日(土) 正午始

演目の解説

能「岩船」(いわふね)

延臣が高麗唐土の宝を買い取る市を開く為吉吉の浦に下ると、大和詞を話す唐人の童子が市にやつて来ます。ます。童子は宝の珠を持ち、それを臣下に捧げ奉げた後、高麗唐土の宝が積まれた船がこの住吉の浦にやつて来る事を約し、その船を引く天深女こそ我なりと名乗り、暫く待てと言つて消え失せします。延臣が待つていてと八大龍王が權竿を手に現れ、岩舟を曳いて金銀珠玉の宝を降らし、御世のますますの栄を寿ぎます。

狂言「樋の酒」(ひのさけ)

主人が太郎冠者に米蔵、次郎冠者に酒蔵の番をするように言いつけて出かれます。次郎冠者が早速酒蔵の酒を飲み始めるので、太郎冠者はうらやましくして仕方がありません。そこで次郎冠者は、酒蔵から米蔵へ樋を渡して酒を流し、太郎冠者にも飲ませることに成功します。すつかり調子に乗つた二人は...。本舞台と橋掛かりをそれぞれ蔵に見立て、能舞台ならではの構造を上手く活かした狂言です。樋から酒を飲む場面はもちろん、にぎやかな狂言小舞がいくつも登場する酒宴も見どころです。

能「班女」(はんじょ)

野上の宿の遊女花子は、東国へ下る吉田少將と契りを結び、帰りを待ちますが、少將と取り交わした扇を手にして仕事をしないので、追い出されてしまいます。一方都に上る少將は野上に立ち寄り花子を訪ねますが行方がわからず、仕方なく都へ向かいます。糺の森に着いた少將達は、秋には忘れられてしまふ扇にちなんで「班女」と仇名をつけられた花子に出会い、互に扇を見せ合つて再会を喜び、あらためて契りを結ぶのでした。

能「融」(とのおる)

旅の僧が都に上り六条河原の院の旧跡を訪ねると、塩波の浦に会います。塩波みとはと不審に思つた僧が尋ねると、老人は河原の院に昔、源融の邸が在つたこと、難波の浦から毎日潮を汲んで都に運ばせ、ここで塩を焼いて陸奥の塩釜の風情を楽しんだ融大臣の事を語り、昔を懐かしみます。僧の求めに応じて名所の数々を教えた老人は、最後に汐を汲んで見せると桶を残して消え去り、最後に汐を汲んで見せると桶を残して消え去り、魔墟に佇む僧の夢中に、在りし日の融大臣となつて現れ、月下に舞を舞います。

12:55
13:30
15:10

岩船 隆士

ワキ 梅村 昌功
間 岡 聡史

大鼓 柿原 孝則
小鼓 古賀 裕己
太鼓 林 雄一郎
笛 杉 信太郎

後見 宝生 和英
藤井 雅之

木谷 哲也
藤井 秋雅
東辰巳 尚史
水野 渡邊 茂人
亀井 上 優二

樋の酒

野村 遼太

飯山 悠樹
竹山 豪

〜休憩十五分〜

班女 憲正

ワキ 野口 能弘
間 高野 和憲

大鼓 柿原 昭弘
小鼓 船戸 弘
笛 小野寺 竜一

後見 朝倉 俊樹
高橋 亘

金森 良充
佐野 弘宜
内當山 飛淳
藤山 能司
東川内 崇生
佐野 光夫
和久 荘太郎

〜休憩十五分〜

融 シテ 小倉健太郎

ワキ 館田 善博
間 竹山 悠樹

大鼓 安福 光雄
小鼓 住駒 充彦
太鼓 小寺 真佐人
笛 栗林 祐輔

後見 金井 雄資
小林 晋也

上野 能寛
田崎 甫
金野 泰大
佐野 玄宜
小倉 伸二
武田 孝史
辰巳 満次郎
澤田 宏司

終演予定 午後四時四十分頃

次回予告

平成三十年十月二十日(土) 正午始

三輪 東川 尚史
橋弁慶 金井 賢郎
鉄輪 渡邊 茂人



◎入場料 一般 / 5,000円
学生 / 2,500円

◎会場 宝生能楽堂

JR水道橋駅東口 徒歩3分
都営地下鉄三田線 水道橋駅 A1出口 徒歩1分

☎113-0033
東京都文京区本郷1-5-9